

晴等を戒め堅守して出づる事とありらぬ、食糧器具を給ふ、軍を擧げて姫路に凱旋す、元春も亦火を途次の氏家より放ち、軍を引ききて安藝國に還る、

信長公記、天正九年、辛巳十月二十八日の條より曰く、羽柴筑前守秀吉出陣、因幡伯耆之境より山中鹿介、弟亀井新十郎為御身方居城候、是迄羽柴筑前守参陣、爰より伯耆へて山中谷合より節所と云ふ事大方あらず、即時より南條表相働、羽衣石と云ふ城と云ひ、南條勘兵衛御身方として相拘候、同舎兄小鴨左衛門尉、岩倉と云ふ所より居城、兩人忠節之筋

目候處、吉川罷出、右之両城へ着向三十町間許、隔間の山と云ふ所より張陣也、

總見記より曰く、十月廿六日、毛利輝元が伯父吉川元春大將とて、熊谷豊前守益田越中守三刀屋彈正等三千餘人、因州鳥取の城後詰の由め、伯耆國まで参陣すといへども、落城を聞きて、當國大崎へ寄せんとせしが、詮あき由にて、直に伯州の味方南條勘兵衛が籠居り、羽衣石の城小鴨左衛門尉が籠り居り、岩倉の城を攻めんとす、羽柴筑前守秀吉、鳥取表より於て、此の告をき、長陣の疲労より屈せず、大軍を率いて、南條小鴨等を援らん多め、伯州へ發向す、

翌廿七日、秀吉鎧冪に着陣し、そよより馬山の
向ひ高山に上り、吉川が陣を目下に見おろす。
〔按すより今も鎧畑といふ地名あり、青谷に鎧
の袖の重り多るに如き畑あり、或て是をあら
ん〕又高山冠山の名ありといふ。因伯の境に山
中鹿助幸盛が智亀井新十郎味方とあり、居城
し、秀吉に相従ふ。于時雪降甚寒ありとて、秀
吉是を凌いど、節所高山の山路を物の数と
もせど、翌廿八日の朝、羽衣石、岩倉の両城へ悉
く兵糧を入、籠城の支度軍謀等懇切に申し置
き、本陣に帰り、馬山の敵吉川に向き對陣し、七
箇日滯留し、諸事國中手遣ひ申付け、國中の人

質取集め、蜂須賀小六郎、木下平大夫兩人押へ
と、馬山へ指向け、羽衣石、岩倉兩城へ、取続
き人数段段に備へ置き、兵糧玉葉大夫に入置
き、来春相働くべき旨申合せ、秀吉に士卒を將
て、當表を引上げ、播州へ歸陣す。

安西軍策に曰く、天正九年十月中旬、鳥執籠城
の兵糧尽きて、及難儀の趣、藝州到来ありと、元
春朝臣為後詰、伯州馬山に到り出張し給ふ折
節、方々の手當に指遣、軍兵少かりけりとも、及
延引、鳥執落城せむ、大勢寄せても無詮とて、嫡
子元長、二男元氏、三男廣家、杉森元秋、毛利元康、
其の外、元春國侍熊谷豊前、益田越中、三刀屋

彈正等馳隨、都合其の勢三千餘騎、同月廿五日、
馬山に着陣し、翌日因州大崎へ寄せんとす。
處に鳥執落城の到来あり、然る處に秀吉急に
伯州へ打越、吉川と可遂一戦とて、同廿七日、馬
山の向高山に打上陳取、馬山を目の下に直下、
數萬の軍兵峯谷に充滿多り、此の馬山を左に
湖後を檜津河如形の節所也、元春後の檜を切
落し、湖水の舟無残陸に引上げさせ、櫓械本陣
へ取込み又元春^長廣家を仰せり、前にて柵結ひ、
敵合の道二筋造らせ敵寄せらんと待ち懸け
給ふ廿八日、秀吉南條が城へ兵糧を入ると
て、峯傳する勢雲霞の如し、元春朝臣、井上平右

右衛門、山縣惣右衛門に、鑓砲百挺添へ、今日玄
蕃を檢使とし、松ヶ崎へ打出で、鑓砲打懸け、
敵を招く、悉く打出バ、一戦を決せんと宣ふ、二
人の者打出で、二三千の敵に近付きてたらし
けり、大雪降りて五三間の中も難見、互に
相待つ處に、五六段前ある小松山の危のさき
に、鑓砲一つ打ち多り、誰あらんと見る處に、千
代延與助あり、敵の真先を、み多る武者、大
將と覺敷者馬上より真逆に打落し、吉川家人
千代延と聲高に名乗りけしを、敵を手負を抱
へ、味方の陣に入りけしを、今日、井上等、敵に塩
付け多りと、よろこびけり、是をを不知、馬山

よて敵大勢出で多りと聞き給ひて、是れこそ
頼ふところあり先元長兄弟可出、元春と秀吉
本陣の体を見て可出とて、元長、廣家打ち出で
給へば、熊谷伊豆守、同豊前守、杉原等二千餘騎
よて、松可さきへかけつゞけ、南條、小鴨等
是れをみて、只今かけいづけるて、吉川元長兄
弟あり、御人数被下候て、忽打ちとるべしと
申けしを、美濃守(羽柴)元就より、あらんと宣ふ
を聞き、藤堂與右衛門尉、中村式部少輔、神子
田、亀井等我先よと山下へ馳下り、一萬四五千
續き多り、元長兄弟も二千餘騎よて、てせむか
ひ一向よそあへて、まち懸け給ふところよ、秀

吉の本陣より、いきり軍使を立て制せらる
けれむ、上方勢頓り引きよけり、角て秀吉三日
三夜、い多つらよ對陣あしむ、黒田小六方角味
方の南條等是非衆りくづし給へとて、めけ
まども、秀吉も外圍物見をいぢり、城中の體を
聞き、又橋きりおとし、舟引上げ多るを見、元
春無二の覺悟を知りけるよや、一戦よも不及、
廿九月、高山岡陣より、因州鳥執迄引入給ひけ
り、

甫菴太閤記より曰く、從去六月及十月下旬、鳥取
の城を取巻、昨日二十五日攻め落し、諸卒の疲
勞不可勝計之、然る間諸勢をも慰めんと思ふ

處、伯州南條勘兵衛尉居城羽衣石、小鴨左衛
門尉が居城岩倉を攻めんとて、吉川駿河守元
春多勢を卒し、伯耆國へ打越え、彼の兩城可攻
于之用意甚急也と告げ来る、秀吉おぼし給ふ
と、於鳥取の城諸卒久々疲労せしむ、困窮さ
あそと痛みぬけり、雖然、彼の兩城を不相救則
敵の氣を被吞事案の内あるべしと被仰けり
と、善祥坊(宮部)其儀を存候、唯急ぎ有御出勢
被決勝負、南條、小鴨が急難を救はせ給ひあは
信長公も感悦し多まふべしと諫めりけり、秀
吉もかくある處しと、兼て被存候いつしども、
先諸人の氣を休めん為め、評議し多まひし

あり、秀吉能くし諫めけるかあさして明朝打
立可急として、先備の面々も、其の由觸之可申旨、
増田右衛門尉も被仰けり、其の次へ誰々と次第
を定めらしめり、各承り、其の次第に任せ、夜半
よりおき出打立ちしむ、秀吉の出馬も午の
刻ありしや、寔に打つべき多る長陣、諸勢も疲
して見えけしども、其の夜も亀井新十郎後武蔵守
が居城、因幡國鹿野に着陣し、翌日鎧冨と云ふ
處に陣取り給ふ、吉川も敵の羸氣を察し、打圍
まんとや思ひけん、又遠攻みせんとや思ひけ
ん、先馬山に宿陣せしあり、然る處に蜂須賀小
六郎、木下平大夫其の勢三千餘騎をおさすと

して、其の近辺の在々所々々悉く令放火、兵糧米等監妨せさせ、則南條小鴨が城へぞあめりける、然る上は鉄砲の玉薬弓矢等大夫は籠の置き、弓鉄砲の歩立三百人御合力有りて、年内籠城の介別專一は候、敵取還し合戦を挑み、決勝負と望み待て共、心遠慮可然と諫め給ひけり、兩人申上げ、るて、何やうも御下知を相守可申候、於因州永々御在陣おてしまいつの上は、是迄御進發殊更種々御合力云。云。旁以御厚恩高如山深似海、當國を自今月至仲春、逐日雪積り、馬の通ひし不安也、急御帰陣被成候やうもと、連て言上有り、うて、應其の義先

々令帰陣、來春も早々遂進發、此表存令、可申付之條、可安心緒之旨、令堅約、霜月十一日、至播州姫路、令歸陣給ふ
陰徳太平記に曰く、於伯州馬野山、吉川、羽柴對事、去ぬる七月、羽柴秀吉數萬の軍兵を以て、因州鳥取の城を取巻、日夜を不分攻動を由、其聞之有りけり、吉川元春近日後詰可有之と擬せらる、先雲伯の勢を為可被催、七月下旬、治部少輔元長、伯州八橋の城まで被打出、杉原播磨守盛重と評定有て、軍勢を催促せらりけり、共、伯耆半國の勢を南條兄弟が為押處々の向、城は被籠置々、雲州にて三澤三郎左衛門、同嫡

千捕津守去ぬる天正六年上月陣中より南條
ト心を合せ、秀吉ト内通すと、卷説有りけり、
三澤全くと存野、心由、数通の起請文を書きて
進ぜりけり、共、猶身上の大事此時也と思ひ、
己が城ヲ取籠り、身構へり、打出けり、間、何く
ことして時節勢あそ無りけり、元春無勢也と
て延引し、若、鳥取の城没落せば、縦何百萬騎を
催し、多り共、何の益り有らん、不若先、伯州へ上
り、杉原盛重を召具して、因州へ立越え、有無の
一戦すべしとて、旗本の勢三千五百餘騎、勢州
新庄を打出、雲州富田に着陣有りて、此の地は
暫逗留御坐、國中の勢を被催、小早川左衛門、佐

隆景も、秀吉猛勢也と聞ゆ、然る元春雲石藝の
勢にて、後詰せらば、人事、臧否を論ずるに殆
み近し、率や同く馳向て、可戮力とて、備後、備中、
安藝、周防、長門の勢を催さる、然し共長門へハ
大友宗麟、元春、隆景、京勢と對陣せらば、其賞
み衆て、門司の関より推渡り、國中を切從へん
と議せらば、ける間、一國の勢を皆彼が壓への
為り、他國へ不得出、備中の勢を宇喜田秀家より
信長へ訴へて、元春、因州へ打出で候て、其虚
を得て、備中國へ可打出候、御加勢を可賜と申
すに、因て、織田七兵衛、筒井順慶、己下を備前國
へ指下さる、よと披露有る故、皆己が城に在

て敵の下向を待ちける間、彼此より付て南方の
勢も少かりけむ、今少間勢の加はるを待て、
發足延引せらむけり、元春て徒に後陣の勢を
非可待とて、九月二十日、伯州八橋の城より着き
給ひ、盛重と軍議有りて、安否の一戦と被定所
より、播磨守時節風気が被侵、前後不覺の体也け
む、嫡子彌八郎元盛、二男又次郎景盛、諸軍勢
の兵糧菜肴等を奉る、於是暫北方の勢を催し
給へむ、杉森少輔十郎元秋、毛利七郎兵衛元康
熊谷伊豆守、嫡孫豊前守益田越中守、三刀屋渾
正左衛門馳せ集る、三澤為清も、十月初旬より馳
参り、りむ、其勢己より六千餘騎より成りぬ、同こ

日、輝元雲州富田より着き給ひ、同五月、隆景の着
陣を待受、急き伯州へ打越、元春より力を可合と
宣へて、隆景今少待ち給へと抑留あり、元春父
子と鳥取城兵糧尽きて、涌難儀より及ぶの由告
げ来りけむ、頃て八橋を打ち出でんとし給
ふ所より、輝元、隆景より使者を馳せて、大軍の敵
より僅の勢を以て對陣せらむんと、何の役をか
成し候べき、今暫く待ち給へと宣ふより因て、そ
のまま、八橋より取へ給ひけむ、共、鳥取落城近き
より逼りぬと聞えり、かむ、此上て軍兵の趨らん
を待ち得て何かせんとして、同二十五日、當國馬
野山へ陣を被替、翌日、大寄へ陣を移さんとし

給ふ所、鳥取、丸山一昨日没落し、經家已下遂
自害の由告げ來りぬ、元春此由を聞き給ひ、於
然て因州へ打上て有無興亡の一戦して、經家
が孝養子供へんとて打立去んとし給ふ所、
秀吉南條元統を可見統為め、近日伯州へ打
入八橋の城を陥し、其より雲州富田迄可攻
入との覺悟し候、御用心候へと重波を打て告
げ來りしり、元春父子四人さあらむ、於此處
秀吉を待受け、一戦を可遂とて、其ま、馬野山
の陣を居給ふ、斯くて秀吉も鳥取、丸山の西城
を攻め落し、一先打入、明年も至て伯州へ攻め
入り、八橋已下の城共を可攻と宣ひける所、

蜂須賀彦右衛門正勝が嫡子の小六家政進み
出で、此勢も乘りて南條兄弟が城へ兵糧を
被入候へ、若、渠等兵糧尽きて城を落さし候ひ
あむ、重波も御味方も屬する者候とと被申
ける所、吉川元春出陣して候と伯州より告
げ來りける間、秀吉さらむ此勢も吉川を可討
取とて、同二十七日、羽衣石山續の高山へ打上
馬野山を山足も直下して屯を張り給ふ、其勢
兼て八萬騎、又ハ六萬餘騎共聞えしが、左は
そのへ只今打出づる所の軍兵四萬四五千七
や有らんぞらんと見え多し、蓋馬野山の地形
たて湖水漫々として、洪濤巨浪浸天、微茫多し、

右に礮巖峯と云ふ、崩岸遠石推蘇も足痕を
絶、狐兔纏り運を通じ、後て橋津川曲流萦回し、
岨以濇決と云ふ香象も難渡、橋一條の外は往
復の道を絶多り、其陣する處も前も一箇の險
峻隘路と云ふ、平山短山と云ふ、此程勝軍も伐
て其の氣焔々多る十倍の大敵を頭上の高山
より引受け多らんをや、敵地の利も就いて、山上
より彈丸を轉するが如く、直逆も下しかけあ
ひ試使死生不知の藝州勢也、共一溜りも溜り、
引手の湖水後の河底も追ひ入らるれ、一人も
生きて歸る者も不可有と思へむ、如何も大勇
將の名高き元春と雖ども、今夜一夜もよも堪

へ給えと見えける間、京勢ども哀じ吉川今
夜計懐より、明けあむ一文字も切て懸り、介
捕高名せん物をと、勇み討らむと無りけり、
吉川駿河守元春も、嫡子元長、次男元氏、三男経
言相共も打出で給ひ、敵陣を杳も見渡し、敵軍
兼て六萬餘と聞き、左許を無りけり、四萬
も少許や餘るべき、さき共吾勢も比せむ倍徒
幾許ぞや、惟ふも秀吉吾が軍も寡也と思慢る
氣有るべし、主將驕敵と敗亡の端也、今日を己
も午天も過ぎ多しを、人馬の息も休め、且も吾
が陣の様体をも可窺然らむ當陣へて明日も
可切懸待受けて秀吉の旗許へ無二無三も切

て入、手の下子可討取、かゝる多勢の強敵も逢
ひてあそ、吾が日來の武勇をむ潤色せめとて、
莞爾と笑て立給ひけるが、頓て後子渡り多る
檣津川の橋を引落し、隱岐隱岐守清家、竹安木
子、元武道が衆來りて、係置き多る數百艘の警
固船共、悉く陸地へ曳上げ、櫓械不殘撲折せら
る。是志を一致し、一向討死せんとの胸
懷を士卒に視し給ひし、昔秦の穆公晋を伐
んが為め、河を濟り舟を焚きて、必死を示せし
強勇も、前歩を譲らんと覺え多り、元春父子
常て小敵を見て、庸將の大敵に逢ふが如く
恐じ、大敵に對して、愚將の小敵を見るが如

く勇み給ひけるが、此時も又大に進み給ひ、少
も臆し多る氣色を無ありけむ、哀大剛將や
と、敵も味方も不覺吐舌寒心す、熊谷伊豆守と
豊前守子向ひて、あら心涼しき元春の行迹や、
合戦て勢の多少に不依、將の強弱士卒の和不
和に在り、然し大將と大剛強も士卒又死を一
途に思ひ定め、地形を後子可歸道を断、左右子
可道便あり、橋を引、櫓械を打折給ひし、項羽
廬舎を焼、船を沈めし、等し、又韓信が背水
の陣に協へり、味方の為め、惡地を惡地と作
り、愚將の所業也、今かゝる惡地を好地と成を
と、良將の謀也、將と云ひ兵と云ひ地の利と云

味方必勝現然多るごと、大に勇みけしむ、是も
聞輩彌死を軽んじ、一足も敵の方に進んで相
戦ひ、名を滅後萬年、可揚と、烈氣一段の輝光
を益り、雲、伯石の國人三澤三郎左衛門父子、三
刀屋澤正左衛門其外會合し、秀吉鳥取、丸山
を陥、勝誇多る大軍にて、味方の頂の上より打ち
出でらる、然るに味方、城を被落、勇氣後にも
る小勢の而も山下に陣取り、ゆるきをや、勝敗不
論し、被知多しむ、先來銳を被避、重て隆景と
勢を并せて合戦を遂給ふ様、可申と評定し
、益田越中守を先主て、本陣へ馳参り、渠等
兼て、元春も味方勝利ありき道を思ひ給ひ、其、

氣顔を、顯るべき間、其、機嫌を窺ひ、諫言を可
納と思ひ、設けしむ、元春淺黄の袴長く著あり、
さもおひらかある有様にて、對面有久、四方山
の話、心静まり給ひけるが、日も暮しぬ、晚炊出
だし候へと宣ふ所、或人鞋の三尺許あるを
献りしむ、頓て烹調せしめて、面々之を賜
たり、風味殊也と稱美しぬ、元春宣ひけるに、各
吾等、燼中品字の柴、醗酒を暖めて、不知苦
寒、凄愴、心悠々然多るに、秀吉、山頭の風宿さ
し、盛震積雪、烈氣、筋骨をらん、敵の艱辛を
思へて、味方、甚安樂也とて、緩然と打解て御
坐ける故、國人等、案々相違し、覺えしむ、中

々衆議せし諫諍云出すべき様ルあく退出し
けるが、誠ニ元春を智仁勇相兼ぬ給ひあると
て云ひあがら、中ニも剛愎第一ニ御坐す物哉、
周武王以ニ萬二千五百人勝紂之億萬之衆、魏
之五萬破秦之五十萬、を以て思へむ、勝敗の
理て大將の器の善惡ニ在りて、軍士の衆寡ニ
不依、信長臣として君を殺さんとし、又天台山
を焼失し、衆徒行人を誅せらるゝ惡行を、夏
桀殷紂ニ不異、天の喪亡を降さん事、拳踴待ち
つづ、今信長の内ニ四天王の如く唱ふ、羽柴
秀吉、柴田勝家、惟任光秀、瀧川一益等も皆勇の
一端を世に勝りありと雖も、仁慈の道夢に

み多し不知、元春父子に於ける、武備の勝り多
るのみあらば、仁愛を施し給ふ事、渠等も比せ
む、同日の論をも不可成、刀劍の利て不如、仁と
云へり、秀吉一旦の勝利に乘り、大軍を以て叱
す共、遂よて陣を拂て可歸也と、行語り称歎し、
各陣屋にぞ歸りける、曰、熊谷信直が郎等産
谷志摩守と云ふ、死生不知の溢者あり、敵陣を
見渡して立多りけるが、秀吉の陣如何に用心堅固にすべしと云ふ事。今宵本陣の傍に火を
付けんずるものをと云、朋友共是を聞き、
向後て天下兵馬の上ニ可立と称する秀吉何
ぞ、命今油断して、汝に火を被付事の有るべき
と云ひけり、志摩守此の上を千言萬語し、

詮しあし、待て物を見よやとて、頓て其夜忍び
入り、云ひし、不違秀吉本陣の傍に火を付け
陣屋四五軒焼立て、熊谷^谷手の者、戸谷志摩守直
忠秀吉の本陣に火を付帰候也、ヶ程油断し給
ひて、一定不覺を取り給ふべきも、畿内又て
美濃尾張の兵と一般に思ひ給ふ、敵に敵
に可依也と、さし高聲に討りて馳せ帰りけり
とて、諸人大に驚き騒ぎ、其男遁す、お打ちとすや
とて、手々に追ひ蒐けりけり、と、暗夜おすむ
何所をむかり共不知、唯猛火消し多るをよ
みして、皆陣屋にぞ入り、りける、此て夜の更
に從て、雪覆すが如く降り、寒風筋骨に徹す、元

春明けおむ敵必定寄せ来るへき、待ち受け
一戦の際に切崩すべきぞとて、諸士に下知し
て夜中に控門の前、隙を穿、芝土手を築、柵を
結はせ、突いて出づべき門二箇所に明て、敵の
來ん道筋の雪悉く清むせ、明くる夜晚しと待
ち給ふ、斯く共知で秀吉と敵小勢おすむ、必定
今夜可引退を、追ひ懸け打ち取らん、各油断を
おと士卒に觸傳へて、外聞物見隙おく出だし、
敵今や退くと待ち給へり、

秀吉敵城批判、茲退軍之事、さし共馬野山の
陣、悠然として静おすむ、秀吉を始め部將諸
軍に至る迄、真に大膽不敵の元春父子哉と、皆

心中より恐感トけることぞ聞えし、さきを雲伯
の國人等も、元春父子奈子至剛をよむとて、有
此馬子秣飼鞆置かせ、其上より物打掩て、今や引
き給ふと待ち居多り、元春を謀以みどく、殊も
剛強の大將ありて、敵の多勢をも不^{モウカフ}屑大雪降
勝きて寒夜也とて、燼中より柴閣と焼せ、帶解紐
を甘^{シヤク}げて、背灸り高軒より寢給ふ、さらむ油断
の体ありと見せむ、元長兄弟終夜夜行り給ひ
けり、杉原元盛、横道權允を近付け、汝を元春の
本陣へ行、様体窺見て来るべし、河の大勢を對
し、さる、如何様明日返る堪へ給ふと覺ゆる
そとて、差遣をせり、又三刀屋、澤正左衛門久祐

と、坂田平藏と云ふ者を、是より元盛が云ひし
様より下知して遣りけり、渠等様体闖^{ウツ}て馳せ歸
り、主人より告げて云く、元春を宿^病宿發り多りと
て、宵より地爐より柴打燃させ、昌披^{オビ}背灸て臥給
ひ、鼻雷噉々として陣屋の外より響き、諸士共々
河の用心より多る体あり、小鼓^{ウツ}搥^{ウツ}謡^{ウツ}噉^{ウツ}て心
安氣ある有様にて候、さて予断の体かと思へ
む、元長御兄弟を更隙なく諸陣を行らせ給ひ
候と云ひけり、元盛、久祐是を聞き、哀元
春父子程大剛強あり大將を、又可有共不覺前
より剛敵味方の城を攻め取て、大^{ウツ}勇^{ウツ}み、殊も
十倍より多る勢を以て、頂の上より叱を張り、後より

と又南條が城を、秀吉加勢を因被入、渠龍の水
を得多る勢を成すと聞ゆ、其間、在りて機後
に多る小勢を以て、何の恐るゝ、気色も亦、士
卒若逃眼をや遣てんぞらんと、兼ねて察之、高
卧安眠し給ふ事、往事孔融が北海の太守あり
し時、袁譚が為め、所攻、流矢雨の如く、集り、
矛戟内、接りし、共、融、憑几安座、讀書して自
如多りし、等し、誠、古今、卓立せる勇將、社
金華而不厭と云、此の人をや云ふべき、大將斯
の無二の胸襟、亦、味方六千と敵の六万と
も可勝、秀吉の大勢不足、恐とぞ勇みける、元春
もかく寛然として、御坐あがら、諸士の心中

影護くや思ひ給ひけん、陣々、竊り人を遣し
被見ける、立、歸り角ありと申、申、杉予、濁
八郎、同、又、次郎、兄弟、博奕、雙陸、心を入、斯
る寒夜、諸祖で、兩米一賽と打出たり、又手を
切、接て小賽、々と氣を張り、聲を高うし、
請願へむ、傍より、南風不競と叫びありて、共
み、亡羊を不知、三刀屋、久祐、河井、入道、を敵手
にて、圍棋を催し、大指を龜めて、十目二十目三
十、四十と目算し、應對是非をも耳外に聞、実
是、元春、久佑、を、知、り、候、と、申、し、け
し、む、元春、久佑、を、従、来、武、勇、の、譽、有、る、者、と、申、し、む、
む、左、山、有、る、べ、け、し、杉、予、兄、弟、を、歳、二十、を

越ゆる共、ニッニッ、不可過、剛柔若何と思ひ、
誠ニ延昭が有父風が如く、父盛重に能く育
りけり、哀熊勇虎威の士やと感稱し給ひ
ける、此て其夜も明行、二十八日に至て、秀吉蜂
須賀小六家政を大将として、南條が羽衣石の
城へ兵糧を運載させらるゝ、家政が謀り騎馬
数百騎、兵糧一二斗宛負はせり、其上勇士
を乘、城中を乗り込まんとして、峰傳ひに馳せ行
く勢雲の如く霞に似たり、元春井上平右衛門
山縣宗右衛門に鉄砲数百挺相副へ、今田玄蕃
元春政を檢使として、松之等辺へ打出で、鉄砲
打係挑て見るべし、若し香飼に食ひ付きて一戦

せむ、當時より打出で一合戦すべきぞと宣
ひけむ、兩人畏て打出下より山縣を敵の色
を考へ見て、軽き働きぬ、井上を深入りして、敵
の多勢懸り來たむと、少くも不引、今田と一
所を拒、多り比て神無月中の十日も過ぎ行く
空、北國を勝てて最寒ある日、今日しも谷尻嶺
風烈く雪吹く、五間三間の内も不分明、折々
風緩ひ多る時見む、敵二千許打出で段々
に備へあり、中にも正前に進むる武者二騎、馬
上を指麾を把て後陣の勢を振き多り、驚破味
方一人も不殘打取らむと見ると、又山
風雪を巻て驚々として來り、物の綾目も不見け

る程子、最早敵後をやり取り切り多るらん、好今
と進し不遁所也、堅固子切死する迄よと、中々
一途子思ひ定め、皆一處子集り、鑊炮立並べて
待ち係け多る所み五六反許前ある小松山の
尾寄子鑊砲一つ鳴り多り、誰あるらんと思へ
む、千代延與介、敵の真先蒐多る武者大將と覺
しき者、馬上より真逆に打落しつ、彼の武者さ
る者子てや有りけん、馬より落つると等しく、
郎等共多く馳せ集て、中子取込み味方の陣へ
引きよけり、さよむ此時敵涌多く馳せ加はり、
味方己子危ありつるよ、與介が功よ依て、味方
機を得る。のみあらず、今由井上勢とあはれ一をを得る。上方勢初度の合戦は一塩付けあり

と勇み悦ぶ事限あり、是を不知馬野山の本
本陣へて、敵多勢打出で、味方己子難儀子オホ軍が
由告げ來多りける間、元春敵の出でける由そ
幸あはれ先元長被馳向候へ、吾と秀吉の本陣
の様体見計ひて可打出ぞと宣ふよ依て、元長、
元氏、經言打連して出で給へむ、熊谷伊豆守信
直、嫡孫豐前守元直、杉原彌八郎元盛、同又次郎
景盛等、相従て二千餘騎、松之寄へと進ん多り、
南條伯耆守元續、小鴨左衛門進元清、羽柴美濃
守秀長、卿子向て、只今一二千許よて打出で多
るよ、吉川元長兄弟と見えて候、總の勢よて候
何の危き事の候べき、御勢を被下候へと勧め

けむで、秀長を可宜と宣ふを聞きて、藤堂與右衛門、井合次郎右衛門、中村孫平次、神子田甚右衛門、亀井武藏守等、吾先と山下へ下降、其勢一萬四五千續き多り、驚破藝州勢、此勢は避易しく、可引退と思ふ所、元長兄弟は不_レ疼_レ静まり返り、御咄すを見て、今日こそ京藝弓矢の勝負を決せらるべしと、客主片津を吞首を引て望み居多りける所、秀吉より軍使を以て、敵を鳥取を落さし、愠_レりを會、無二の合戦と覺悟せる機、顯然あり、然るを小勢也と侮り、泛々と打出づる事甚所謂あり、殊に本陣の下知をも不待、秀長一心の所存を以て、一戦の覺悟、

秀吉を輕んずるは似多り、早く勢を被打入候へ、敵念の心は引りて、無二の一戦と志を故に去り、時々の一夜に堪へ多し、大將元春父子去り死すとも去らんと思ふ、士氣卑_レ、隳_レの輩共、今夜に一定夜逃し可為ぞ、進も可勝軍に危き戦を慎んで待て、追討せよと所制ける故、秀長を始め皆進むに不及、悉く打入りけり、官部善染坊、元長兄弟の振舞を見て、元就の武勇三代に不減、吉川が在らん程に毛利家弓矢可盛、小早川が在らん限に毛利家の政道不_レ邪_レ、竟の子不_レ似_レ、竟として、古に聖賢すら子の賢不肖を不_レ任_レ心、子孫に至る迄知勇相兼く傳來

すらん、さすを彼、人壯年の比も、大内義興、尼子
經久等の名將、或も七州或も十一州の大守多
り、元就僅も吉田三千貫を領して、兩間も介ま
り多す、更も一國の主と成る事不能、兩將死
後も至て、漸數箇國を切り従へらるゝとて、
齡七旬も及び也、今二十歳若からましく、
天下の權柄も元就多るべかりし、老年も及
んで國主多りし事、おそく、盈を欠く、昔の頼
朝、時政、尊氏等の良將、元就も知勇の勝多
す、非も、唯果報のいみづく、時を得多ると
不得とみして、地を易む然あるべしと稱歎し
けしむ、中村、神子田等此程小勇も伐つて、元春

あの小勢も何程の事の可有あど云ひ、
多りしが、官部が正論を聞き、又上月もして被
押立あるを思ひ出で、小敵と侮りて、必定
仕損おべしと、今更思ひあから、猶も負し魂も
や、又己の勇をや頼みけん、今夜夜討して切崩
してん、あど擬しけるを官部無益の夜討の企
や、敵陣へ夜討せんより、味方夜討も不被、為用
心し給へ、宿し熊谷が手の者も、秀吉の本陣被
焼多ると如何と云ひけるも、皆口を籍で
音しせさりける、左程も秀吉南條元續を近
付、敵陣の間何十町り有るべき、勢の程も美濃
守が陣取程もや有らん、多制と云も六七千も

不可過と思ふを奈よと宣へて、元續、元春吾
之勇ヲ誇り、小勢を以テ遠路を歴て來り候出
そ、天の兵ヲ所にて候へ、早く切崩さし候べし、
吉川父子翁ヲ滅亡候て、小早川本どて一支
も支テ逃亡多るべき間、破竹の勢を迎へて雲
州より藝州迄、靡然として御威老ヲ畏服可
仕候事、當年來春の間を過ぎ候ていと云ひけ
らむ、秀吉莞爾と笑ひて御座しけるが、あま
る戸摩利の城にて誰ヲ籠るや、元續さん候杉
原播磨守盛重が、鞆河口刑部少輔久成と申す
者にて候、勢も僅、百四五十騎もや候らんと答
ふ、秀吉此多勢ヲ對し平山の傍方掘切て芝工

手築せ、浅まある小城も何の用心も多る体も
なく、門外も人一人も不出、緩々として在るを、
惟も敵も思ひ侮^{アホ}せ、寄せ來らん時無二無三
も切て出で、萬死一生の合戦を可決との覺悟
にてぞ有らん、哀剛の志哉と感^ト給ふ、又松
之寄の城も、小森木工允在て、篝火をも不焼、大
門をも不鎖、出入の人影もなきを見給ひて、い
ふ様小森も城を明け退き多る体もてあり、
敵を泛々と堀の手も付るせ、墓地も切て出で
んとの謀ある乎、又て敵も油断させ、一夜討^討
べきなど擬する心もや、かゝる城共も此方
も亦其の意を得て、容易に人馬を不馳^{不馳}が軍法

の一格也、何れ大膽不敵の族共哉とを宣ひけ
る、其外宇津吹條山等の城に用心密にいて
見えけしを、秀吉あら詔きの者哉、去奈に項籍
樊噲が勇を作共、吾ぶ士卒を勞せむ、片時が間
も堪まらざる物をもと冷笑て御座を、さて秀吉元
續が勸むる所、實尤も可有と思ひ給ひけしを、
今日明日の間は敵陣を可被切崩とて、宗徒の
侍大將を召集め軍議し給ひけしを、蜂須賀彦
右衛門進又出で、元春父子を當世の大剛將
也と兼て承て候ひしが、實もかゝる大軍は
向て、僅の勢にて少くも恐る、無氣色、舟を引
上げ槁を落して、無二の覺悟をせる様体を顯て

せり、昨日松之壽邊、元長兄弟打出で多るを
見るに僅二千許にて數萬騎は馳せ向多る形
象を兎角十死一生に思、究多ると覺候、上方
勢古く大軍の敵を見逃、聞逃仕り、又小敵に
對しては、無下り思、悔て唯掌上に運さん様は
勇又候へ、敵も敵に依り候ひあらず、佐々木朝
倉本ぞ一様の脅を成し給ふへ、あらず、鳥取丸
山を被、陥、憤怒方寸の中は満て、哀懸まゝ一
場の間、存亡を可試物と思ひ切多る敵は、
小勢也として心易く思、泛々と懸り給ひあむ、一
定敗績し給ひて、永年の耻辱を都鄙の入口に
残し給ふべきを、衆寡の勢異あまむ、一旦の勝

利て得給てん共、軍卒大半て討多き候ひあ
ず然らば重て大軍の輝元、隆景に對せらば
子付ひて、其の害甚く候べし、是より上策
あり、其の害甚く候べし、是より上策あり
ず、唯可然と諺に申すが如く勝て胃の緒を縮
めらば候へ、可く一死賊と成り多る敵をむ、此方
よりも亦強剛を以て相對せん事を却て智計
の不足所あり、さして強以て強、折咥、雨滴
の微弱消、簷下石と云へり、先此の度を敵の突
を去らば、重て勇機の緩まん所を撃給ふべし、
是より楠正成、隅田、高橋の大敵に向て利を得
りしり共、宇都宮が小勢より來鏡を去て引退
多りし謀と一般にて候べき、鳥取丸山兩城を

攻め取給ひ多きを、只今引き退き給ふとて、
全く御弓矢の瑕瑾にて候と、勝敗進退の
事理分明に諫めけしむ、秀吉此の儀に心服し
給ひて、さらば諸所の雪不積其先よとて、同二
十九日、羽衣石山纒の陣を引拂、因州鳥取に至
て軍を旋し、天より播州姫路をさして上り給
ふ、元長兄弟後を可慕と進み給ひしり共、元春
深く制止給へば、愠を按へて留まり給へり、さ
てこそ京童共圍碁象棋の戲言も、無二に思
切多き覺悟するをむ、吉川橋を引多し所業を
なせりと、工商の考弱のみり、語り繼言繼て、云
台八座の貴家高門、口碑に傳へく喧し、斯くて

元春父子四人、雲月朔日、馬野山を周陣し給へり、輝元、隆景も雲州富田より待ち受け給ひ、共々藝州へぞ帰り給ふ。

温故私記より曰く、天正九年十月中旬、因州鳥取の城後詰として、輝元公、藝州吉田を御出馬して、雲州富田へ御着陣あり、御先手にて、吉川元春公、同元長公、小早川隆景公、穴戸隆家、天野元政、毛利元康、國衆も、熊谷豊前守元直、益田越中守元祥、三刀屋渾正久、扶等、都合三千餘騎也、元春公も十月二十五日、泊州馬野山へ御着陣也、翌日、泊州大峯へ御陣を寄せらるべく、御規定ありける處、鳥執落城の到來あり

然る處、秀吉毛利家と一戦を遂げんとて、泊州へ打越、同二十七日、馬野山より向ひ、高山より打上り、馬野山を目の下に見おろし、數萬の大勢、嶺も谷も一面に陣あり、元春公御陣所、馬野山の左に湖水、後には橋津川ありて、形のおとくある切所あり、山田出雲守重政より仰付らる、橋津川の橋を切落させ、湖水の渡り舟も悉く陸へ引上げ、櫓械も本陣へ取上げ、敵合の道二筋作らせらるる多り、國衆云はせけるも、元春公も無二の一戦と見え多り、杉原盛重人数を加へて、七千ほどの小勢にて、上方六萬餘の大軍と一戦し及びて、十も一つも味方の勝利あり

ま、元春公へ異見すべしとて、各一同の本陣
へ参らまじけしむ、元春公御出合にて、いつも替
らぶ色々の會釈あり、御咄の序も、各敵陣を見
らまじ、薄雪降て、此方より面白けしむ、秀吉
も、此寒威を凌ぎ、嘸迷惑せらるべき杯とて、餘
念もあらず見えけしむ、終り異見の發語もあ
り、末遣退出せり、元春公頼て焚火にて背をあぶ
り多し、御近習の衆も、御雑談あどあり、さ
ども皆人と十死一生の合戦、必定太儀と存し、
雜兵も至るまで覺悟を詰め多し、翌二十八日、
秀吉も南條元次が城へ、兵糧を籠させ、敵勢段
々より峰を傳ひ、谷へ下ると見え多し、吉川殿も

り井上平右衛門、山縣總右衛門、銀砲百挺仰
付あつて、李之寄と云ふ所へ差出させし多し、槍
使も、今田玄蕃を遣させ、兩人の者ども、銀砲
を打蒐けさせしむ、敵大勢出づると相聞
たり、元春公願ふ所ありとて、先元長経言出
給へ、我等も秀吉旗本の備を見合せ出づ、
と仰せらる、依て、杉原盛重父子、熊谷伊
守信直、同豊前守、二千餘騎にて、元長公、経言公、
同前より松ヶ崎へ打て出づ、南條元次、舎弟、
鴨元伴等秀吉の陣より居て云ひける、唯今士
川元長兄弟備を出だし多し、御人数を打下
し、あを、輒く打取るべきと云ひけしむ、秀吉も

と同意し、先手各へ云ひ渡さしけりて、藤堂は
右衛高席、中村式部少輔、神子田半右衛門、亀井
武藏守茲矩等、我より先よと押下す、其の勢一
四五千の人数、続いて見え多り、元長公経言公
二千餘騎よて打ち向ひ、備を立て、待ち多
す、然しども秀吉の本陣より軍使を以て、敵相
い多すまどきの有堅く削せらしけりし依り、
上方勢悉く人数を引揚げ多り、吉川殿より浦
を入り給ふ、其の後昏夜三日て對陣し多ま
さしども元春公無テ覺悟リ輝元公、御後詰として、大軍を率し、
州津原見まで御出張、其勢雲州富田まで打
きけしを、秀吉一戦し及むが、十一月朔日

山を圍陣有て、因州鳥執まで打入しらしけり
む、輝元公も藝州吉田へ御馬を納しらし多
八頭郡誌稿より曰く、天正九年六月、秀吉兵六万
を帥め、再び因幡に入り、市場城主毛利豊元を
攻め亡ぼし、進んで鳥取久松を攻め、七月より
十月まで包圍攻撃し、遂に之を陥之、同月二十
三日、鹿野城に入り、時己に嚴寒ありを以て、姫
路より還らんとす、偶羽衣石城南條元統、吉川の
攻撃急より、城危殆ありを以て、援軍を乞ふ
頻あり、秀吉乃ち之を援けんと欲して、同月二
十七日、鹿野を發し、河村郡潮津村の鎧畑に陣
す、而して重賢木下備中守及蜂須賀小六郎より

兵三千を率ゐて、直に羽衣石に至り、南條の後援を乞ふ。秀吉は鶴ノ山に、元春を馬山に陣し、相對峙する。三日あり、元春歸路舟梁を撤し、所謂背水の陣を布き、死を以て自ら矢ふ。時天寒く雪深し、秀吉曰く、天寒く敵勁し、未だ冀ふ可らざるありと、乃ち兵糧を南條に與へ、十一月、師を班へし、姫路に還る。

澄川正彌踏査聞見誌に曰く、吉川經家、十月廿五日未明に自殺し、多豆を、其の日直に秀吉公に鹿野城に奉らせしあり、其の通路を安長より海岸を経て、鹿野に入らせしものあり、其の證を、水尻池の附近大崎城外を通らせし時、城

中より狙撃せんとせしを、秀吉公を笑ふ應ぜらせさりしと、口碑に傳へ多り、

11
21
126

終